

史料紹介：草創期九州文化史研究所の史料収集活動 ：『採訪日記』の紹介

梶嶋，政司
九州大学附属図書館記録資料館：助教

<https://doi.org/10.15017/1547113>

出版情報：九州文化史研究所紀要. 49, pp.71-122, 2006-03-30. Manuscript Library, Historical Records Section, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



史料紹介

草創期九州文化史研究所の史料収集活動

『採訪日記』の紹介――

梶 嶋 政 司

1 はじめに

昭和九年に当時の法文学部内に設置された九州文化史研究所は、設立以降九州各地の史料採訪を行ってきた。⁽¹⁾ここに翻刻紹介する『採訪日記』は昭和九年から同二十二年にかけて九州文化史研究所が行った九州各地の史料採訪旅行の記録である。寸法は縦27・5 cm、横19・7 cm、九州帝国大学法文学部の野紙に墨書二十九丁、複数の筆跡が認められる。『採訪日記』を見ていくことで、草創期の九州文化史研究所の史料収集の具体的活動内容を知ることが出来る。さらに昭和十年代の九州地方の史料所在状況を見ることが出来る。以下では採訪先での活動を県毎に整理していきたい。

ところで、現在記録資料館九州文化史資料部門（以下当部門）には写本類と呼ばれる資料群が収蔵されている。写本類は創設以来の九州文化史研究所の史料収集活動により謄写されてきたものである。⁽²⁾本稿では『採訪日記』の記事と写本類との照合も試みたい。

2 『探訪日記』に見る史料探訪

【福岡県下の史料探訪】

表1を参照しながら福岡県下の史料探訪を見ていこう。昭和九年八月三日から翌四日にかけて遠藤正男講師⁽³⁾は豊津にある旧小倉藩主小笠原家別邸ならびに豊津村役場を訪ねている。小笠原家別邸では同家の蔵書目録の筆写と主要な書物の検索を行った。『探訪日記』では豊津で「日田御貸附金拝借証文」、「日田御郡代塩谷大四郎様御領地巡回新聞一件」を筆写したことが記されているが、現存する写本類には見あたらないようである。なお豊津の小笠原別邸には九月と十月にも探訪を行っている。九月十三日には長沼賢海教授⁽⁴⁾以下金田平一郎助教⁽⁵⁾、遠藤講師、青木義憲助手、本多副手、松本氏らが訪れ、一日で大半の史料の調査を終え副本（写本）を作成するものを選び出して後日の借用の約束をして帰った。十月十日には金田助教、青木助手、本多副手の三人が再び訪れ行李一

表1 福岡県下の史料探訪

年 月 日	探 訪 者	探訪地（者）	活 動 内 容
昭和9年8月 3～4日	(遠藤)	豊津小笠原別邸	小笠原家蔵書目録の筆写と主要書の検索、豊津の日田関係史料を筆写
		豊津村役場	
昭和9年8月10日		秋月黒田分家	所蔵文書・記録を検索、目録抄の作成、重要書類の筆写、借用依頼
昭和9年9月13日	長沼、金田、遠藤、青木、本多、松本	豊津小笠原別邸	副本作成史料を選定、借用の約束
昭和9年10月 (10日)	金田、青木、本多	豊津小笠原別邸 豊津中学	調査分のうち行李一杯の史料を借用
昭和10年7月2日	青木、波多	黒田家福岡別邸	史料借用
昭和13年11月26日	金田、井上	久留米地方 庄島町東原家 篠山神社 黒岩万次郎宅 鶴久二郎宅	蔵書拝見、数点借用 所蔵有馬家別邸蔵書の目録拝見 収集史料拝見、数点借用
昭和15年9月15日	金田、原田、岡部、有富	島原郡前原町 由比泰介宅 西原藤次郎宅	史料借用 古証文類を見る
昭和18年12月26日	金田、原田、明石、北条	糟屋郡青柳村	浅島武幹氏より教示
昭和22年8月13日	金田、宮本、秀村	秋月黒田家	曝書期にあたり古記録充分調査、法制経済史料等多数借用

杯の史料を借用して列車便で九州文化史研究所に発送している。午後には豊津中学を訪問して校長と歴史教諭より教示を受けたが、学校には出土遺物以外に史料は所蔵していなかった。現在当部門が所蔵する昭和九年から十年にかけて謄写された小笠原家文書の写本類五十三点はこの時の成果品であろう。

話を八月の調査に戻そう。遠藤講師は三・四日に豊津を調査した後、五日から九日まで大分県各地を廻り、十日には福岡県朝倉郡秋月町の旧秋月藩主黒田家を訪ねている。秋月黒田家では目録抄を作成し、重要な史料については筆写を行った。また「御定書写」、「風説書」、「御勘定所御作法御改正二付一件書」、「御当用米銀年々惣約帳」、「長貞公御代記」等の借用依頼を約束している。この時筆写したした「重要書類」の書名はわからない。秋月黒田家については、その後昭和二十二年八月十三日に、金田・宮本又次両教授と秀村学生（秀村選三氏）の三名が曝書期間中の黒田家を訪れ、「参考となるべき法制経済史料等を多数借用」した。現在写本類のなかに残る二十八点の秋月黒田家文書写本は何れも昭和二十二年の謄写であり、この時借用され筆写されたものである。

昭和十年七月二日には青木助手と波多氏が旧福岡藩主黒田家の福岡別邸を訪れている。『採訪日記』に「第二回分拝借（中略）三十六部四十冊を拝借」とあることから、第一回拝借分があつたことがわかる。黒田家文書の写本類を確認してみると昭和九年に二十四冊、昭和十年に二十四冊、合計四十八冊が存在する。第一回の拝借は昭和九年に行われたと考えられる。謄写した史料は江戸往来海陸日記や唐船漂着記などが大部分を占める。借用冊数との不一致は謄写の際の合冊などが考えられる。

昭和十三年十一月二十六日、金田助教と井上囑託⁽⁷⁾は久留米地方に出かけた。篠山神社で蔵書を拝見し数点を借用している。写本類を見てみると篠山神社の蔵書を昭和十四年に謄写したものが十三冊ある。この時借用したものを翌年にかけて謄写したものと思われる。内容的には法令集や漁場争論関係の史料が多い。次に郷土史家の黒岩万次郎⁽⁸⁾邸を訪問して、旧久留米藩主有馬家別邸の蔵書の目録写を拝見している。黒岩が有馬家別邸蔵書目録写を所持

していたのは、彼が大正元年七月に設置された伯爵有馬家修史所の史料収集委員を務めていたことと関係があると考えられる。ところで金田助教は続いて諏訪野町で八百屋を営む郷土史家鶴久二郎氏⁽⁹⁾を訪ね、収集史料の一部を拝見し数点を借用した。鶴久氏収集史料については昭和十三年から翌十四年にかけて五冊の写本類が謄写されている。法制史関係の史料が主である。また、今回事情により莊島町東原家への探訪は叶わなかったが、昭和十三年謄写の東原家蔵書写本四冊が写本類のなかに確認出来ることから、同年中に再訪し史料を借用したものと思われる。史料内容は久留米藩の法令集や判決録といった法制関係史料である。

昭和十五年九月十五日には金田教授以下原田如一⁽¹⁰⁾、岡部囑託、有富氏⁽¹²⁾が糸島郡前原町由比泰介郎、西原藤次郎邸を訪ねている。由比郎では「重岡富家感牒記備考」を借用し、西原郎では古証文類を見せてもらっている。なお前者については昭和十五年謄写「重富家感牒記備考」(暦応三年より天文四年)が写本類に存在する。

昭和十八年十二月二十六日には金田教授、明石助手、原田・北条囑託で糟屋郡青柳村を探訪し浅島武幹という人物の教示を得ている。

【大分県下の史料探訪】

表2を参照しながら大分県下の史料探訪を見ていこう。昭和九年八月五日から九日にかけて、遠藤講師は大分県下をまわり史料探訪を行った様である。八月五日には大分市図書館と大分高商(現大分大学)図書館を訪ねている。翌八月六日には玖珠郡森町役場で旧森藩主久留島家の文書の所在を確認した上で文書借用を依頼している。また森町役場所蔵の文書数点の筆写を行った。以上についても写本類には残っていないようである。なお「近々郷土史館ヲ設置」されたかは不明である。なお森町には昭和十六年十一月に金田教授、波多野皖三助手⁽¹³⁾が訪れている。この時は光林寺帆足琢磨氏の紹介により玖珠郡南山田村の小野敏夫氏⁽¹⁴⁾から教示を得たり、得重弥太郎町長⁽¹⁵⁾から高配を得て

表2 大分県下の史料採訪

年 月 日	採 訪 者	探訪地(者)	活 動 内 容
昭和9年8月5日	(遠藤)	大分市図書館	参観
		大分高商図書館	
昭和9年8月6日		森町役場	久留島家文書所在確認、文書借用依頼、森町役場所蔵文書筆写
昭和9年8月 7～9日		日田町広瀬家	史料借用、「南陔日記」筆写依頼
		千原豊太氏	所蔵古文書筆写依頼
		武石繁次氏	
		森甚左衛門家	
		森春樹家	
	旧掛屋山田家		
		淡窓図書館	
昭和9年10月 (11日)	金田、青木、 本多	旧大庄屋遠入家	
		中津小幡記念図書館	奥平期の藩政文書を調査、借用約束、赤松文二郎、稲葉倉吉から教示をうける
		中津中学	図書・史料借用
昭和16年3月11日	金田	臼杵中学	久多罷木儀一郎氏より教示
		臼杵図書館	稲葉家古記録閲覧
		稲葉家別邸	
大分高女			
大分県庁		文書課書庫に明治初年の藩関係記録多少存在することを確認	
大分図書館		藩侯松平氏古記録多数保管(未整理)を確認	
竹田町			
竹田中学		今野七郎、衛藤浩氏より教示	
長尾子郎氏		蔵書記録拝見、数部借用(文化史にて謄写)	
昭和16年11月17日	金田、波多野	大分県立図書館	
		大分県庁	
		大分県立第一高女	十時英司氏より教示
昭和16年11月18日		豊後森町	光林寺帆足琢磨、小野敏夫、町長得重弥太郎氏より教示、久留島家記録を披見
昭和18年10月 11・12日	金田、原田	杵築	入江榮所蔵文書(正応～慶長)6巻を披見 杵築町長土居寛申宅を訪ね種々開示
大分市		十時英司氏の紹介で大分県聯合史談会常任理事三重野幸夫氏に面会し、所蔵書籍記録文書の開示を願う	
昭和18年10月13日		大分県立図書館	府内藩記録多数保管を知り、日記借写願い承諾を受ける

いる。「久留島家記録ヲ披見」している。

八月七から九日にかけて日田の各所を訪ねている。豪商広瀬家では「日田金」関係資料や九州諸藩の藩政改革関係の史料を借用した。特に「南陔日記」廿八巻ノ筆写ヲ依頼ス」という記事に着目してみよう。現在、写本類には二種の広瀬久兵衛（南陔）日記が存在する。C2-13-22『南陔日記』（天保十一年より嘉永七年、二十二冊）とC2-39-63『広瀬久兵衛（南陔）日記』（天保十二年より安政七年）である。前者は謄写年代不詳、後者は古写本となっており、何れも謄写年代がはっきりしていない。そこで先程の記述を踏まえると、何れかが昭和九年頃の謄写本である可能性が高い。表題から推測すると前者の『南陔日記』が該当すると思われる。

このほか森甚左衛門家、森春樹家では史料の所在は確認しているが閲覧は出来なかった。さらに山田家（日田旧掛屋）や淡窓図書館にも行っている。日田地方の著名な郷土史家であった千原豊太と武石繁次の両氏を訪問し「所蔵ノ古文書綴（経済資料）」の筆写を依頼していることも注目できる。

十月には金田助教、青木助手、本多副手が中津を訪れている。九大卒業生で中津中学に勤める河野福夫氏と共に旧大庄屋遠入家を訪ねるが当時の史料はなかった。中津小幡記念図書館では旧中津藩奥平期の史料の存在を確認し、改めて借用することを約束し目録を借りた。旧中津藩奥平期の史料については、写本類を見てみると昭和十年には六十二冊謄写を謄写していることが確認できる。⁽¹⁸⁾中津小幡記念図書館では調査中の郷土史家赤松文二郎、⁽¹⁹⁾稲葉倉吉両氏に会っている。稲葉氏からは中津市をはじめ築上郡、下毛郡、宇佐郡一円の中世文書所蔵家の情報を得て日記に書き留めている。⁽²¹⁾

昭和九年以降しばらくの間、大分地方の史料採訪の記事は見られなかったが、昭和十六年三月に金田教授が臼杵町、大分市、竹田町の史料採訪を行った。三月十一日に訪れた臼杵町では臼杵中学の久多罷木儀一郎氏の案内により、臼杵図書館に委託されている「稲葉家古記録」の「御会所日記」などを見ている。稲葉家別邸も訪れたが見る

べき史料ないと書き記している。日記中には稲葉家文書借用の記述は見られないが、写本類に昭和十六年謄写の白杵藩の「御会所日記」七冊がある。この時白杵図書館から借用して謄写したものと考えられよう。⁽²³⁾

翌三月十二日には大分県庁で明治初年の藩関係記録、大分県立図書館では松平家文書の存在をそれぞれ確認している。「文書課書庫（中略）明治初年の藩関係記録多少存す」との記述から、県庁所蔵の明治初期藩関係記録の存在したことが判明し、「藩侯松平氏の古記録を多数保管せり、但し未だ全く未整理なり、就中日記類多数保管せられ珍重」との記述から、昭和十六年には旧府内藩松平家文書が大分県立図書館に収蔵されていたことが確認できる。金田教授は同年十一月にも波多野助手を伴って県立図書館と県庁を再訪しているが具体的な活動は日記に書かれていない。旧府内藩松平家文書については、昭和十八年十月十三日に金田教授が原田囑託を連れて再々大分県立図書館を訪れた際に、日記の借用謄写を願ひ出て承諾されている。現在、当部門には昭和十七年から翌十八年にかけて謄写された大分県立図書館所蔵の「府内藩日記」、「同日記別冊」、「萬覚帳」など計六冊が所蔵されている。

話を三月十二日に戻そう。午後には竹田町を訪れている。竹田中学の今野七郎、衛藤浩両氏に面会している。衛藤氏の案内で長尾子郎氏を訪ね「蔵書記録」を拝見している。写本類によれば「御系譜」「中川家」、「三公御事績」、「御宿取勤方」「定令録」といった岡藩関係史料が昭和十六年に謄写されていることが確認できる。⁽²⁴⁾

昭和十八年十月十一日には金田教授と原田好一囑託は杵築町の入江栄所蔵文書を閲覧している。⁽²⁵⁾翌十二日には土居寛杵築町長とも交流があったようである。翌々十三日には大分県立第一高等女学校教諭十時英司氏⁽²⁶⁾の紹介で大分県聯合史談会常任理事三重野幸夫氏し面会し、氏が所蔵する書籍記録文書の閲覧を願ひ出ている。金田教授は昭和十六年十一月十七日に十時氏と面識がある。

【佐賀県下の史料探訪】

次に表3を参照して佐賀県下の史料探訪を見てみよう。昭和十年四月に長沼教授、金田・遠藤助教授、鏡山講師⁽²⁷⁾、青木助手が旧佐賀藩主鍋島侯爵家を訪れ内庫所に所蔵されていた旧藩政史料を調査、「研究資料として必要なるもの百七十三冊を（中略）六ヶ月を限り借用」している。写本類を確認すると、影写・謄写は昭和十年から翌十一年にかけて行われ合計三百六十一冊の書冊に仕立てられている。多くは中世史料である。佐賀鍋島家については昭和十七年十二月にも金田助教授が訪れ内庫所から熊本藩関係記録を借用している。このとき金田教授が借用した史料は、昭和十八年謄写に謄写されているようである（写本類B23-7-11）。昭和二十年二月にも内庫所を再訪して蔵書を若干を見いだしている記事が確認できるが、採訪者はわからない。

金田助教授は昭和十四年三月には旧鹿島藩主鍋島子爵家ならびに旧佐賀藩主鍋島家親類同格武雄鍋島男爵家を訪ねている。武雄鍋島男爵家では史料（日記）と多くの洋書を見いだしている。なお鹿島鍋島家には翌昭和十五年二月に金田助教授が大谷囑託⁽²⁸⁾を伴って再訪し、史料を閲覧している。

昭和十四年九月には金田助教授と原田囑託で小城、多久、唐津を回った。小城では江頭久太郎を取次者として旧小城藩主鍋島子爵家の内庫所に保管されている記録類を見ている。その後、太田保一郎氏⁽²⁹⁾を訪ね、佐賀与賀町中野五郎⁽³⁰⁾、久保田の村田男爵家に「古記録」があるという情報を入手した。小城鍋島家で閲覧した史料については日記に書目が写されている。多久では多久聖堂付属図書館で委託書籍を調査し、大塚巳一氏⁽³¹⁾を訪ねた。唐津では吉村茂三郎宅⁽³²⁾で筆写された文書、植村平八郎宅⁽³³⁾では同氏が預かっている文書をそれぞれ見せてもらっている。閲覧書目を書き留め唐津藩の庄屋辞令書を筆写している。ところで写本類に「唐津市吉村茂三郎氏蔵書」として『宝蓮花院文書』が昭和十五年に影写されている。『採訪日記』には見あたらないが借用影写したものと思われる。

小城鍋島家には同年十月に金田助教授が飛石助手を伴って再訪し、内庫所より行李一杯の文書を借用している。

さらに翌昭和十五年二月には金田助教教授、大谷囑託で三度小城鍋島家を訪れ昨年十月に借用した文書のうち二十三冊を返却し新たに四十冊の文書を借用した。日記に返却と新たに借用した書目が写されている。謄写は昭和十四年から十七年にかけて行われ合計二十六冊の書冊に仕立てられて

いる。

昭和十五年二月十七日には小城再訪のほか、鹿島鍋島家（既述）、祐徳稲荷社を訪問し、祐徳文庫を見ている。鹿島鍋島家で閲覧した書目は『採訪日記』に書写されている。翌十八日には蓮池鍋島家家務所を訪問し家務所書庫の史料を

表3 佐賀県下の史料採訪

年 月 日	採 訪 者	探訪地(者)	活 動 内 容	
昭和10年 4 月13日	長沼、金田、 遠藤、鏡山、 青木	佐賀鍋島侯爵家	内庫所所蔵の旧藩政史料を調査し 173冊を6ヶ月間借用	
昭和14年 3 月22日	金田	鹿島鍋島子爵家	日記、洋書、大砲の所在を確認	
昭和14年 3 月24日		武雄男爵家 武雄中学		
昭和14年 9 月 5 日	金田、原田	小城 小城町鍋島子爵家 太田保一郎氏	内庫所にて記録類を見る	
		多久 多久聖堂附属図書館 大塚巳一	委託書籍を調査	
昭和14年 9 月 6 日		唐津中学	植村平八郎氏を訪問	
		吉村茂三郎宅 植村平八郎宅	吉村氏筆写文書を見る 植村氏預かり文書を見る	
昭和14年10月30日	金田、飛石	小城町鍋島家	内庫所より行李一杯の文書を借用	
昭和15年 2 月17日	金田、大谷	小城鍋島邸	昨年10月30日借用のうち23冊返却と、 新たに40冊借用	
		鹿島鍋島邸	史料閲覧	
		祐徳稲荷社	祐徳文庫より史料借用	
昭和15年2月18日		蓮池家務所	書庫の史料を見る	
昭和15年3月17日	金田、大谷	武雄石井良一宅	所蔵諸文書記録を見る	
昭和17年12月22日	金田	佐賀鍋島家	内庫所の熊本藩関係記録を借用	
昭和19年2月5日	金田	佐賀地方裁判所		
昭和19年2月9日	金田	伊万里裁判所		
昭和20年2月22日	金田、宮本、 北条、中村	呼子 呼子町役場 小川嶋捕鯨会社	古記録無し 資料借用	
昭和20年2月24日		佐賀鍋島家別邸	内庫所蔵書若干を確認	

閲覧している。蓮池鍋島家事務所で閲覧した書目も日記に書き留められている。また十八日朝には宿泊していた旅館に徴古館の久保大来氏⁽³⁴⁾、女子師範の河野房雄氏の来訪を受けていた。

金田助教授と大谷囑託は、昭和十五年三月には武雄の石井良一宅を訪ね所蔵文書記録を見ている。⁽³⁶⁾昭和十九年二月には金田助教授は佐賀地方裁判所と伊万里裁判所を訪れている。昭和二十年二月二十二日には金田教授、宮本助教、北条雇、中村雇の四名で呼子町役場を訪ねたが「古記録」は見あたらなかった。小川嶋捕鯨公社では同社の沿革史と生月島の絵図を借用している。謄写は昭和二十一年に行われている。

【長崎県下の史料探訪】

表4は長崎県下の史料探訪をまとめたものである。昭和十一年夏に長沼教授、鏡山講師が対馬の「宗教産業法制等に関する資料を多数借用」した記事が見えるが具体的にはわからない。⁽³⁸⁾

金田助教授は昭和十四年三月二十二日、諫早に旧佐賀鍋島氏親類同格諫早男爵家を訪ね、翌二十三日には旧大村藩主大村伯爵家を訪問している。日記の記事から、当時諫早家の主要な史料は長崎図書館に寄託されていたこと、しかし土地関係行政関係の未整理記録は同家書庫に残されていたことが確認できる。諫早家文書については、慶応四年佐賀城内諫早屋敷から事務記録を民船四艘に箱詰めして諫早の自邸に移したが、小屋の前に積み上げられ雨晒しの状態であったという。⁽³⁹⁾その一部が千冊余の「諫早日新記」であり、昭和十四年当時は既に長崎図書館に寄託されていたのである。⁽⁴⁰⁾

翌二十三日大村を訪ねている。大村中学校で、旧大村藩主大村伯爵家の書庫には「一般に知らせざる史料」が存在するという情報を入力しているが、「早急には開陳不可能」ということで調査は次回へ持ち越したとなった。大村家へは同年九月三日に再訪をはたし、「大村家記」、「大村家譜」、「大村家覚書附録」、「大村家覚書」を借用してい

るが、これらが「一般に知らせざる史料」とは考えにくい。むしろ「四五の編纂物」と記しているものである⁽⁴¹⁾。

なお「大村家覚書」、「大村家記」、「大村家譜」は昭和十四年に謄写している。九月三日の再訪の折、旧家老大村彦右衛門家にも古文書があるとの情報を入手したが、調査し得たがは不詳である。⁽⁴²⁾

翌九月四日、金田教授は原田囑託と共に長崎県庁、長崎県教育会館、長崎図書館を廻った。県庁文書課書庫では明治初期外交・法律関係の古記録を閲覧し、教育会館では中島聖堂関係の文書と遺品を見ている。長崎図書館では青方文書「御掟書一冊」を借用した。御掟書は昭和十四年に謄写された。

中島聖堂とは正保四（一六四七）年に向井元升が開いた学問所立山書院が正徳元年に旧鑄鉄銭所跡に移転され聖

表 4 長崎県下の史料採訪

年 月 日	採 訪 者	採訪地（者）	活 動 内 容
昭和11年夏	長沼、鏡山	対馬	宗教産業法制に関する資料借用
昭和14年 3 月22日	金田	諫早男爵家	倉庫に土地関係行政関係の未整理記録が存在することを確認
昭和14年 3 月23日		大村伯爵家	4・5点の編纂物の存在を確認。同家倉庫に一般に知られていない所蔵資料があることを大村中学で聞く
昭和14年 9 月 3 日	金田、原田	大村伯爵家	古文書借用
昭和14年 9 月 4 日		長崎県庁	書庫で明治初期外交、法律関係の古記録を見る
		長崎県教育会館 長崎図書館	中島聖堂関係文書および遺品を見る 青方文書御控書一冊を借用
昭和15年 3 月14日	金田、大谷	島原第一小学校	所蔵の校長林銑吉収集史料を見る
昭和15年 3 月15日		島原松平家管理所	史料閲覧
		神代鍋島邸	
昭和15年 3 月16日		神代小学校	
		平戸松浦家	引用書目録、南庫帳、御蔵書目録より書き抜き
		沖図書館、 沖記念館	
昭和19年 2 月10日	金田	長崎控訴院 検事局	
昭和22年 9 月25日	金田、宮本、 森、秀村	長崎図書館	文書記録類調査、多数借用、副写依頼。
昭和22年 9 月 (26日)		平戸	都合により松浦家所蔵文書は見られず、郷土史家の詳細説明を受ける

廟が新築されたもので、祭酒向井氏が貞享二年（一六八五）より唐船輸入書籍を点検する書物改役を任せられていた。そのため中島聖堂関係の文書には唐船貿易関係の史料も含まれる。中島聖堂関係文書は昭和九年に在東京の向井兼徳氏より長崎県教育会に寄贈され、目録が作成されている。

ところで『探訪日記』には「中島聖堂目録」の一部が書き留められている。これは昭和九年に中島聖堂関係文書が長崎県教育会へ寄贈された際に作られたものと思われる。日記に書き留められている書目を列記してみると①「長崎会所勘定帳大意書」一冊、②「明治廿年調長崎市土地戸口帳」一冊、③「文化文政天保弘化嘉永安政年間唐船方日記並配銅帳」六年文五袋外二一袋、④「文政十一年信牌控」一枚、⑤「未拾壹番南京船之唐人共申口」一枚、⑥「享保六年遼東人参ノ件」一枚、⑦「菊池家系譜・向井家由緒書」合一卷、⑧「巳二番四番六番唐船拔渡書籍改帳」一冊となる。ところで中島聖堂関係文書は、その後昭和二十五年八月に長崎図書館が預かることになり新たに目録が作成されている。さらに昭和三十四年一月に長崎市教育委員会に寄贈され市博物館に架蔵され、同四十三年と同六十三年に市博物館より目録が刊行されているが、これらの目録に、昭和九年目録に掲載されていた①、②、④、⑧に該当する史料を見いだすことが出来ないようである。⑦についても類似のものとして「向井家由緒書」があるが、「菊池家系譜・向井家由緒書」合一卷と同一のものを指すかは不明である。なお写本類を点検してもこれらの史料を借用謄写した形跡はないため、今のところ史料内容の確認は出来ていない⁽⁴³⁾。

昭和十五年三月十四から十六日にかけて、金田助教授は大谷嘱託を伴って島原から平戸を廻っている。十四日には、島原第一小学校校長で郷土史家の林銑吉氏⁽⁴⁴⁾による収集史料を同校で閲覧している。主要なものが『探訪日記』に書き留められており、収集史料は豊前から肥後の地方関係史料に及んでいることがわかる。また島原藩関係の筆写史料もあつたようである。

翌十五日には、旧平戸藩主松平家の管理所に本末金城氏を訪ねた。『探訪日記』に「華夷変態三十七冊、延宝二

「享保九を欠る」と記されていることから、同書を見たと思われる。また「見出御書籍題帳」なるものに「貞永式目鈔」、「貞永式目」、「建武式目追加」といった鎌倉・室町時代の幕府法の書目を見つけ日記に書き留めているところから、採訪者の関心のあり方をうかがうことが出来る。午後には旧佐賀藩主鍋島家親類神代鍋島邸を訪ねるが不在であったため、神代小学校を訪問している。翌十六日、平戸高等女学校の阿部狂介氏の案内で旧平戸藩主松浦家を訪ね「引用書目録」、「南庫帳」、「御蔵書目録」から抜き書きを行った（『採訪日記』に書目あり）。その後沖図書館と同記念館⁽⁴⁵⁾を見ている。平戸へは昭和二十二年九月にも再訪したが、松浦家の所蔵史料の閲覧は叶わず、郷土史家の説明のみを受けている。

金田教授は昭和十九年二月に長崎控訴院と検事局に史料採訪に訪れている。戦後、昭和二十二年九月には、金田・宮本・森教授と秀村学士が長崎図書館を訪れ、入ったばかりの旧長崎町乙名藤家文書⁽⁴⁶⁾をはじめとする文書記録類の調査を行い、「多数記録類借用、又副写を依頼」した。現在当部門には、昭和十二年から三十一年にかけて謄写された長崎図書館所蔵史料の写本五十冊（うち二冊は謄写年不詳）が確認で、このうち昭和二十三年に十四冊の写本が作成されている。

【熊本県下の史料採訪】

表5は熊本県下の史料採訪をまとめたものである。昭和十二年秋、金田助教授は熊本県庁と旧熊本藩主細川家別邸および熊本図書館を訪れている。「県庁には可成り藩政時代の記録類所蔵」されていたが、借用は許可されなかった。『採訪日記』には「熊本県庁文庫目録」の旧藩文書の項目と冊数が書き留められており、戦災で県庁が焼失する以前の県庁所蔵史料の概数をうかがい知ることができる。また「地図は熊本城址保存会にも多数所蔵す⁽⁴⁷⁾」と書き記しているのは、昭和九年三月に熊本県庁から熊本城址保存会に検地帳とともに貸与されていた絵図のことを指し

ていると考えられる。⁽⁴⁸⁾

細川家では「北岳文庫目録」を調査しているが、「複本」を作成するものはなかった。また熊本城趾保存会に整理所蔵されている明治九年からの「熊本新聞」について珍貴であると特記している。なお熊本図書館の史料については先年九大法制史研究室で借用謄写を行っていたらしく、この時には新たな収集はしていない。

翌昭和十三年三月には遠藤・金田助教授が南九州の史料採訪で人吉町を訪れている。旧人吉藩家老家井口兼治邸では同家所蔵史料を拝見しその一部を借用した。現在、当部門が所蔵する井口兼治氏所蔵史料の写本七冊のうち六冊が謄写年不詳であったが、この記事から昭和十三年に遠藤・金田助教授が借用したものを謄写したことが確認できる。

同日、井口氏の配慮で郷土史家淵田卯三郎氏を訪問した。淵田氏からは採集史料の借覧謄写の許可を得ている。淵田卯三郎氏採集史料についても、謄写年代未詳の二十七冊の写本が当部門に存在するが、井口兼治氏所蔵史料同様、この時に借用謄写したものであると考えられる。なお淵田氏採集史料について「就中「相良史料」は最も大冊なり」と

表 5 熊本県下の史料採訪

年 月 日	採 訪 者	採訪地 (者)	活 動 内 容
昭和12年秋	金田	熊本県庁	
		細川家別邸	「北岳文庫目録」調査
		熊本城趾保存会	
		熊本図書館	
昭和13年3月23日	金田、遠藤	人吉	人吉藩家老井口兼治家所蔵資料借用 淵田卯三郎収集史料（「相良史料」） の借覧謄写の許可を得る
昭和16年3月 13～15日	金田	細川家別邸	記録筆写
昭和16年11月16日	金田、波多野	熊本県立図書館	
昭和17年12月 (2・3日)	金田	熊本県庁	所蔵記録を借用
昭和17年12月4日		八代松井男爵家	所蔵史料記録を披見
昭和17年12月21日	金田、明石	熊本県庁	
昭和19年2月20日	金田	熊本地方裁判所	
昭和19年4月1日	金田	八代区裁判所	
昭和19年10月1日	金田、宮本	人吉	

の記述があるのは昭和九年に渋谷季五郎によって編綴された写本『相良家史料』四十巻のことであろうと思われる。⁽⁴⁹⁾なお人吉には昭和十九年十月一日に金田教授と宮本助教とで再訪している。

昭和十六年三月十三日、金田教授は細川家別邸を再訪した。家扶永原邦夫氏の好意で十五日まで記録筆写を行った。「熊本刑法に関する貴重史料殊に判決録口書」の存在を確かめ⁽⁵⁰⁾喜んでいゝ。同年十一月には熊本県立図書館を再訪している。翌昭和十七年十二月、熊本県庁の再訪の折には横溝県知事宇田事務官の高配で「所蔵記録」を借用している。このとき借用したものは、郡方関係史料および明治期に作成された人吉藩の林政慣行并藩政改革調書など六冊であったことが、昭和十八年に謄写された写本から判明する。なお金田教授は同月二十一日にも三度熊本県庁を訪問している。十二月四日には八代市に旧熊本藩家老松井男爵家を訪ね、家職西原貞雄氏の高配を受け、所蔵史料を披見している。このほか金田教授は昭和十九年三月二十日に熊本地方裁判所、四月一日には八代区裁判所を訪れている。

【宮崎県下の史料探訪】

表6は宮崎県下の史料探訪をまとめたものである。金田・遠藤助教は昭和十三年三月二十五日に宮崎県庁と宮崎県立図書館を訪ねている。県立図書館で種々史料を拝見し、借用謄写の許可を得られたので、送本を依頼している。昭和十三年から翌十四年にかけて二十四冊の謄写本を作成している。

表6 宮崎県下の史料探訪

年 月 日	探 訪 者	探訪地(者)	活 動 内 容
昭和13年 3月 25～26日	金田、遠藤	宮崎県立図書館	種々史料を拝見、借用謄写の許可を得る
		延岡内藤家	所蔵記録史料を拝見、借用を約束
昭和19年 3月31日	金田	都城 都城島津別邸	前田原氏より種々開示を受ける
昭和19年 9月30日	金田	都城 県立図書館	座談会を開く

翌二十六日には旧延岡藩主内藤家を訪ね、所蔵史料を見ている。「借用を願ひ後刻手続を了して借用することを約」⁽⁵¹⁾している。昭和十三年に三十三冊の謄写を行つてゐることが確認できる。

金田教授は昭和十九年三月三十一日に都城島津家別邸を訪問し、同年九月三十日にも都城を再訪している。

【鹿児島県下の史料探訪】

表7は鹿児島県下の史料探訪をまとめたものである。昭和十八年三月三十日に金田教授が鹿児島県立図書館、集成館、鹿児島市役所を訪ねている。翌三十一日には玉里島津家別邸を訪ね史料を見ている。⁽⁵²⁾写本類には鹿児島県立図書館所蔵史料の写本が十七冊確認できるが、このうちの「薩州唐物由来考」(B29-6)、「長崎交商一件」(C1-21)の二冊は昭和十八年に謄写されている。日記では具体的記述はみられなかったが、この二書はこの度の探訪で収集したものと考えられる。なお、鹿児島地方探訪には九大卒業生で当時鹿児島第二中学に勤務していた川辺惟定氏の案内をうけている。

昭和十九年九月二十八日、金田教授と宮本助教は出水町役場を訪れ、役場所蔵の「門割制度関係の古記録」を閲覧して、借用謄写を約束している。「全く手入を加へず近來披見の者もなき如く、虫多く入る」状態であつた。翌二十九日には鹿児島地方裁判所、鹿児島県庁文書課、鹿児島県立図書館を訪問した。県庁

表7 鹿児島県下の史料探訪

年 月 日	探 訪 者	探訪地 (者)	活 動 内 容
昭和18年 3月30日	金田	鹿児島県立図書館	
		集成館	
		鹿児島市役所	
昭和18年 3月31日		玉里島津家別邸	記録を拝見
昭和19年 9月28日	金田、宮本	出水町役場	所蔵古記録を披見、借写を約す
昭和19年 9月29日		鹿児島地方裁判所	
		鹿児島県庁	文書課所蔵古記録の借用を承知される
		図書館	

文書課では所蔵史料の借用を懇請し承知された。

3 まとめにかえて

『採訪日記』の記事を見てきた。昭和十年代の九州文化史研究所では、法制史の金田教授が中心となって史料収集活動を行っていたことが確認できた。採訪には、助手、副手に加え、嘱託（雇）が同行していた。当時の業務日誌によれば、借用して来た史料を謄写したのも嘱託である。戦前から戦時期における、大学の史料調査の事例として貴重であろう。採訪は九州各地の旧大名家文書、県庁および図書館所蔵の旧藩文書、郷土史家収集史料、裁判所所蔵史料など採訪は多方面に及んでいた。採訪した旧大名家を列記すれば、小倉小笠原家、福岡黒田家、秋月黒田家、森久留島家、中津奥平家、臼杵稲葉家、府内松平家、佐賀鍋島家、鹿島鍋島家、小城鍋島家、蓮池鍋島家、大村家、島原松平家、平戸松浦家、熊本細川家、延岡内藤家、玉里島津家におよぶ。このほか佐賀藩の重臣武雄鍋島家や諫早家、熊本藩家老八代松井家をも訪ねている。大名家文書は廃藩置県後の混乱の中で廃棄されたり、県に引き継がれたものが廃県編入の過程をへて散逸したり、家史編纂事業で移管されたりと様々な変遷をたどる。⁽⁵³⁾『採訪日記』には昭和十年代の九州諸藩の大名家文書の所在状況の一端がうかがい知れる点で貴重である。

採訪にあたっては、九大卒業生を介して採訪先との連絡をとる場合もある。また地元役場や学校、郷土史家などとの交流も確認できる。郷土史家の史料収集などについてもかいま見ること出来た。所謂郷土史家と郷土研究について、近年学問的関心が高まってきているが、⁽⁵⁴⁾有名無名の郷土史家のなかには未だ知られていないものも多いと思われる。日記に出てきた郷土史家についてできるだけ履歴や著作を掲げることでも少し掘り起こしに努めた。

(表紙)

昭和九年八月日

九州文化史○研究所

採訪日記

(縦 27・5 cm × 横 19・7 cm)

昭和九年

○印本書

八月三日ヨリ同十日迄福岡・大分両縣下ニ採訪旅行ヲナス、日程左ノ如シ
八月三日、豊津小笠原家別邸及村役場訪問。

同家蔵書目録ヲ筆写シ、且主要書ノ檢索ヲナス。

四日、同地ニテ左記書類ノ筆写ヲナス。

一、日田御貸附金拝借証文

六冊

一、日田御郡代塩谷大四郎様御領地巡回新開一件

一冊

五日、大分市ニテ同市図書館及大分高商図書館参観。

六日、大分縣森町役場ニテ町長ヨリ久留島家文書ノ所在ヲ聴取ス、近ク郷土史館ヲ設置セラル、二付、ソノ際ニハ文書借用ノ依頼ニ応ズベキ由、口約ス。同町役場所蔵ノ文書数葉筆写。

七日 大分縣日田町ニテ廣瀬家ヲ訪問、「日田金」關係資料約十部、福岡・田代・府内諸藩ノ藩政改革書類約十冊借用ス。

「南陔日記」廿八卷ノ筆写ヲ依頼ス。

八日、日田ノ郷土史家千原豊太・武石繁次両氏ヲ訪問シ、所蔵ノ古文書綴（經濟資料）数冊ノ筆写ヲ依頼ス。

森甚左衛門・森春樹両家ヲ訪問シ、共ニ若干ノ古文書・記録ノ所蔵セラル、ヲ確メタルモ内容ノ検索ヲ許サレズ。

九日、日田ノ旧掛屋山田家を訪問シ、種々懇談シタルモ、重要資料残存セズ、淡窓図書館ヲ参観ス。

十日、秋月ニ至リ、黒田分家ノ所蔵文書・記録等ヲ検索ス。主要目錄抄ヲ作製シ、且、一二重要書類ノ筆写ヲ行フ。

御定書写、風説書、御勘定所御作法御改正ニ付一件書、御当用米銀年々惣約帳、長貞公御代記等尚重要書ノ正式借用ヲ依頼スベキヲ口約ス。

以上（遠藤）

〇〇印朱書

昭和九年九月十三日旧小倉藩主小笠原家の福岡縣豊津村の別邸に所蔵せらる、史料を調査すべく長沼教授、金田助教、遠藤講師、青木助手、本多副手、松本治彦出向即日帰校す

当日殆んどその大半を調査し、差当り副本作成の必要ありと認められるものを撰り出し、後日改めて借用に来るべきを約して別邸を辞す。

当日雨風強く悪天候なりしも予定の目的を達成一同元氣

○印本書

昭和九年十月十日、金田助教授、青木助手、本多副手等、史料探訪史料借用の爲め福岡縣豐津村、大分縣中津市地方に出向。

十月^十日、先づ豐津小笠原別邸に至り前日調査の分及び当日調査の分の中より約大行李一杯の史料を借用して列車便にて文化史研究所宛発送す、尚ほその際借用史料目錄を作成す、当日午後豐津中学を問ひ校長及び歴史担当の教諭より教示を受く、中学には全然史料を蔵せずと云ふ、こゝ出土品は所蔵せり、その際校友会雑誌及び馬岳城新田氏史蹟の両書の寄贈を受く、中学を辞して附近の國分寺を問ふ、同寺は往昔の國分寺跡にて古瓦等を拝見又その他仏画仏像等を拝観す、夕方の汽車にて中津に至り駅前旅館に宿泊す

十月十日、本学卒業現在中津中学在勤の河野福夫氏宿舍に來訪せられ共に遠入氏を訪ふ、旧幕時代大庄屋を勤めし家と云ふも今は全く当時の史料を蔵せず

次いで中津小幡記念圖書館を問ふ。

奥平時代の史料を相当多く蔵す、一応調査、いづれ改めて借用すべきを約し、目錄を借用す、同館にて調査中郷土の史家赤松文二郎氏、稲葉倉吉氏出向せられ種々教示を受く、殊に稲葉氏よりは後日出張の節史料所蔵家を案内し呉れる由の好意を寄せられたり、尚ほその際聴取せる史料所蔵家の名を念の爲め左に掲記す

葉丸文書

葉丸文書

葉丸文書

葉丸文書

蛸瀬文書

蛸瀬彦三氏藏

湯屋文書

中津市外鶴居村湯屋庄太郎氏藏

佐々木文書

下毛郡山口村佐々木正規氏藏

西淨寺文書

耶馬溪平田

野中文書

同 野中浅人氏藏

宇都宮家譜

築城郡須田村広田

芳賀系図

同 芳賀敏彦氏藏

宇都宮略系図

築城郡東吉留村岡為藏氏藏

広津文書

同 広津重郎氏藏

緒方文書

宇佐郡四日市町渡辺四郎氏藏

尚ほ稲葉氏より葉丸文書の研究一本を寄贈せらる、図書館を辞し中津中学に至り同校所藏の中津歴史(広池千九郎著)、宇佐郡地頭伝記、宇佐郡記二冊を借用す、中学より中津駅に至り同所発夕方箱崎駅著、両日天気晴朗好適の秋日和なりしは幸なりき

○昭和十年四月十三日(土) 晴

長沼教授、金田助教授、遠藤講師、鏡山助手、青木義憲等史料採訪の爲め、佐賀の鍋島侯爵家内内庫所に出張、即日帰校、当日同所蔵旧藩政に関する諸史料を調査し、研究資料として必要なるもの百七十三冊を得、期間六ヶ月を限り借用す、別邸事務の人々より種々の便宜を受け、且閑臾公筆蹟版の寄贈を受く、此日緑さわやかにして初夏の気著し。

○昭和十年七月二日

晴天

黒田家福岡別邸蔵書第二回分拝借に青木義憲氏及波多と参上。執事の熱心なる助力によつて三十六部四十冊を拝借せり

以上（波多）

○昭和十一年夏

長沼教授、鏡山講師対馬に渡り宗教産業法制等に関する資料を多数借用し来る。

○昭和十二年秋

金田助教授熊本市に出向、県庁、細川家別邸等に就き史料を調査す。

県庁には可成り藩政時代の記録類所蔵するも、吏僚事務上の都合を盾に借用を承認せず、長官に談判せんとするも折あしく多忙外出面会の機を得ず、他日を期して帰る。細川家蔵史料ハ同所蔵目録「北岳文庫目録」に就いて調査せるも、当所にて復本を作成すべき種類のものは存せざりき。

尚ほ熊本城趾保存会に明治九年来の熊本新聞を整理所蔵するは珍貴と云ふべし。
最後に「熊本県庁文庫目録」の項目冊数概要を挙ぐべし。

旧藩文書

規程	六冊	社寺	約二〇〇
令達	九	儀制	一〇
任免	一五	倉廩	三

官職 五

軍隊 四

俸禄 二五

租税 二七

山林 六

名簿 八

賞恤 一六

土地 約二〇〇

郡政 三六

戸籍 一六

書式 四

雜書 約六〇

勤務 六

検地帳 約一〇〇〇〇〇枚

地図 約三〇〇枚

尚ほ地図は熊本城趾保存会にも多数所蔵す

熊本図書館も訪問せしが先年借用謄写（法制史研究室）せし以外新集物なかりし。

○昭和十三年三月二十三日

遠藤・金田両助教授五日三泊旅程にて南九州地方に史料を採訪す。

先づ八代を経て熊本縣人吉町に至る、人吉藩の家老なりし井口兼治氏家に至り昼食を馳走せられ、種々同家所蔵史料を拝見一部を借用せり、それより同氏の配慮にて郷土史家淵田卯三郎氏を訪問、種々貴重なる採集史料を借覽謄写の許可を得たり、就中「相良史料」は最も大冊なり。

人吉温泉人吉旅館に一泊す、清流河鹿の声を聞く、温泉又良し、尚ほ人吉にては学生佐野吾郎君の助力を得たる事多大、同君は井口兼治氏の義弟たり、本夕同宿す、

翌二十三日朝相良城趾を訪ふ、古城の色濃し、城趾桜チラホラ。

人吉を午前九時頃発宮崎に向ふ、午後夕方近く宮崎に着す、本学卒業生数名出迎へ呉れる、直ちに自動車にて宮崎神宮に参拝す、神々しき宮居当研究所の成績をも祈念す、大淀川に面せる旅館に投ず、折あしく本日は防空演習にて夜間は暗闇、卒業生諸君と食を共にし歓談す。

二十五日、県庁に至り瀬口氏に面会す、それより縣立図書館に至り種々史料を拝見その借用謄写の許可を館長より得たり、後刻送本を依頼して辞去す

夕方宮崎を發ち延岡に到る

延岡旅館第二夜も亦防空演習の爲めと暗なりき。

二十六日延岡内藤家に至り所蔵記録史料を拝見す、その中借用を願ひ後刻手續を了して借用することを約して歸る、同所にては家扶内藤貫太郎氏より種々高配を得たり。又史料披見につき延岡商業教諭本学卒業安河内博氏の助力を仰ぎたり

二十七日朝泊所を出立乗車福岡に向ひ同夕刻歸着せり。

最初一日は雨になやむ、後天候良好快適の採訪旅行たりし。

○昭和十三年十一月二十六日（日）晴
（朱書）

久留米地方の史料採集の目的を以て同地出身の法科学生吉村氏の案内により金田助教、井上囑託出張、まづ莊島町吉村氏宅にて休憩、次に本旅行の主要目的なりしも先方の故障により不能となりし同町東原氏宅へ立寄り他日の訪問を約し、更に明善校教諭、本学国史科出身の伊奈氏を訪問し同氏の近著「近世筑後の豪商手津屋の研究」（林田正助伝）の寄贈を受く、午後篠山神社訪問町重なる待遇を受け蔵書を拝見し数点を借用し仮証文を入れて辞す、更に伊奈氏の御紹介により郷土史家岩佐万次郎氏を訪問同氏所蔵の有馬家別邸蔵書の目録写

（黒岩一幸宛書）

しを拝見、因みに同目録は近々郷土雜誌に印刷されるとの由につき一部交付を約して辞す、夜諏訪野町に有名なる八百屋を経営せる郷土史家鶴久三郎氏^(三)を訪問、蒐集史料の一部を拝見し御許しにより数点を借用し仮証文を入れて辞す。

此行、吉村氏、伊奈氏の御案内により多大の收穫を挙げ成功す、久留米再訪問の必要を覚える、十一時帰福。

井上記

○昭和十四年三月^(朱書)

佐賀長崎両縣下に金田助教授史料採訪の爲め出向す、二十二日鹿島の鍋島子爵家を訪ふ、手続の關係上史料披見の事不可能の爲め再遊を期す、同日午後諫早の諫早男爵家所藏史料を採訪す、目星しきものは長崎の長崎圖書館に寄託せる爲め存せざるも土地關係行政關係の未整理記録倉庫に存在せり、同夜長崎宿泊、二十三日大村に大村伯爵家を訪ふ、四五の編纂物以外特別見るべきものなし、只大村中学校にて一般に知らせざる史料同家倉庫に存することを聞きたるもその調査は再遊の節に譲りたり（諸般の事情上早急には開陳不可能であつた爲め）、大村に宿りて翌日武雄に武雄男爵及び中学校を訪問す、男爵家にては多少の史料（日記多し）と洋書を可成り多く見出したり、大砲珍貴一物ありたり。

金田記

○昭和十四年九月^(朱書)

三日佐賀長崎両縣下ニ金田助教授原田囑託史料採訪ノ爲出發ス

三日、朝長崎市ニ向フ途中大村ニ大村伯爵家ヲ訪問左記古文書借用ノ件申込ムト同時ニ仮借用証ヲ入レル

大村家記 五冊

大村家譜 五冊

大村家覚書附録 三冊

外ニ大村家覚書 二十一冊アリ

当地大村彦右衛門氏宅ニ伝ハル古文書アル由（大村家寄託）其夜長崎市出島竹井旅館ニ投宿

四日、長崎縣庁文書課ヲ訪ヒ其書庫ニ古記録[△]ヲ見ル、夫ヨリ縣教育会館ニ中島聖堂關係ノ文書及遺品ヲ見ル
（欄外）

「△明治初期外交、法律關係」

「〔中島聖堂拓本定価表〕ヲ受ク」

中島聖堂目錄ノ一部

一長崎会所勘定帳大意書 一冊

一明治廿年調長崎市土地戸口帳 一冊

一文化文政天保弘化嘉永安政年間唐船方日記並配銅帳 六年文五袋外二一袋

一文政十一年信牌控 一枚

一未拾壺番南京船之唐人共申口 小奉書型 一枚

一享保六年遼東人參ノ件 一枚

一菊池家系譜 向井家由緒書 合一卷

一巳ニ番四番六番唐船拔渡書籍改帳 一冊

次ニ長崎縣図書館訪問

御掟書一冊（青方文庫ノ内）借用し借用証ヲ渡ス

終テ佐賀縣小城ニ引返し金居屋旅館ニ泊ル夜九大助手飛石氏來訪

五日、朝飛石氏來訪コノ日ノ案内ヲ受ク

小城町鍋島男爵家内庫所ヲ訪問、其御倉ニテ左記書類ヲ見ル、取次者江頭久太郎

一貞享四年享保六年諸通拔書

一享保十九年諸達帳

一諸役達拔書

一徒罪方達帳写

一紫輪院様御條目写
（兼方）

一御当家令條

一郡方罰帳 宝永〆明治迄

一郡方御條目

一郡方罰帳拔書

一諸役人帳

一幡竿之卷
（編方）

一天保三年ヨリ罰帳
（和）

一元禄三年罰帳拔書 別本アリ

一元茂公御年譜

以下諸代御年譜アリ

一 佐嘉達帳

異名アリ

一日記類多数アリ

一 諸狐法度 寛永

夫ヨリ当地太田保一郎氏ヲ訪問、其話中ニ佐賀与賀町中野五郎、久保田ノ村田男爵家ニ古記録アル由、多久ニ赴キ多久聖堂附属図書館ヲ訪問、委託書籍ノ内ニ左記ノモノアリ

一 肥前旧事

三冊

(一、二 三、四 五、六)

南里居易諸

柴田勝峻筆写

外ニ種々別文アリ

多久聖廟ヲ参拝当地大塚巳一氏訪問、夜唐津着清川旅館ニ止宿

(欄外)

「[多久聖廟沿革史]ヲ受ク」

六日唐津中学ニ植村平八郎氏ヲ訪ヒ舞鶴公園ノ景ヲ償シ当地吉村茂三郎氏ヲ訪問、庄屋辞令ノ写ヲ見ル

大手小路住

写

一 壺石者

右為庄屋給居屋敷作職之内を以遣候也

慶長拾三年

正月三日

志摩（尾張國）○（尾張國）

ぬし屋

勘五右衛門

右主屋村旧庄屋

全氏筆写ノ分ニ左ノモノアリ

一天保十年松浦幕領百姓一揆

一ぬし屋村文書

一中里旧記（唐津焼要録）

一日銭ニ関スル書類（人頭税ニ関与）

一草野氏文書

一小笠原借財整理ニ関スル文書

一黒船焼打ニ関スル事

正保元年の記事

佐志岸田文書ノ内

夫ヨリ植柳氏植村平八郎氏自宅訪問、同氏預りノ文書ノ内左記ノモノアリ

一萬留帳

佐志組宮原春香氏蔵書

一天台宗修験関係古文書

コレハ植村氏保管

一漁獵ニ関スル文書

夕東唐津駅ヨリ帰途ニ着ク

原田記

(欄外)

「全氏ヨリ「唐津藩ノ研究」「松浦史料」ヲ寄贈ヲ受ク」

十月三十日

金田助教授古文書借用之為メ小城町鍋島家内庫所ヲ訪問行李一杯ニ文書ヲ詰メテ持帰ル、飛石助手加勢セラ
ル

途中佐賀鍋島侯爵家内庫所ニ立寄ル

(朱書)

○昭和十五年二月十七、八日、金田助教授、大谷囑託佐賀地方に採訪旅行をなす

十七日、午前十時半小城鍋島邸を訪問、江頭氏取次、昨年十月三十日借用せしもの、中左記二十三冊返却

一、罰帖 十一冊

一、罰帖拔書 七冊

一、郡方罰帳拔書 三冊

一、郡方罰帳博奕拔書 一冊

一、徒罪方達帳写 一冊 以上二十三冊

本日左記四十冊更に借用

一、諸達帳 十冊

一、御達帳 一冊

一、佐賀御遺及触達 六冊

一、佐賀諸達 二冊

一、佐賀触達帳 一冊

一、長崎御仕組帳 一冊

一、検者勤方書付写 一冊

一、諸扣 一冊

一、小城藩職制 一冊

一、藩書半之卷 一冊

一、御條目写 一冊

一、諸獵法度帳 一冊

一、御法度書 一冊

一、郷村御趣法帳 一冊

一、郡方ニ付書付写 一冊

一、郡方御條目 三冊

一、会所罰帳拔書 一冊

一、勘定究役 一冊

一、学職勤式 一冊

一、諸奉行勤心得 一冊

一、紅毛船一件扣 二冊

一、ロンドンよりの書状 一冊

以上四十冊

午後鹿島鍋島邸着、左記書を見る

一、早引安天寛記略 十二冊

(亥の巻に博奕、軽重犯科、御赦免の項目あり)

一、御年譜 十六冊

一、便覧 明治二已三月

夕刻祐徳稲荷社参拝、社司勝屋弘義氏社掌永田一二氏の案内にて祐徳文庫を見る、同所より米政撮要五冊借用。
十八日、朝旅舎に徴古館久保大来氏、女子師範河野房雄氏の来訪を受く

午後内庫所岡野謹一氏の紹介河野氏の案内にて蓮池家務所書庫を見る、左記の如き書あり。

一、蓮池日史略 十二冊

一、史料 直恒公 四冊

直温公 十九冊

直紀公 九冊

直與公 十冊

直之、直称公 一冊

制度 十三冊

続史料 三冊

一、故実探訪録 五冊

一、故実考 一冊

一、請役所日記 元禄十六〜慶応二 大約五百冊

一、日記

一、御案文帳 享保、正徳、文化

一、御藏方諸扣 嘉永

一、田畑帳

一、藩庁日記 明治二

一、御日史 明治二〜十八年

一、官中秘策

尚目録には御当家令條八冊、律令要略二冊書載あり

○^(朱書)昭和十五年三月十四、五、六、七日金田助教授、大谷囑託、島原、平戸、武雄に採訪旅行をなす

三月十四日、島原第一小学校所藏史料を見る、同校校長林銑吉氏の蒐集せるものなり、主なるも左の如し

一、鯨油一件書文 万延二

一、豊州巳秋御取箇一件 安政四

一、辰年御取箇一件 安政三

一、午御取箇下組 安政五

一、肥後国天草 寛政年代
豊後国八代 子御成箇郷帳
大分速見郡

一、御取箇下調 嘉永三

一、從嘉永元申安政四已迄十ヶ年御取簡辻

一、辰秋田畑増引積下組

一、御定免御請達判証文 豊後大分郡安田村 寛政十二

一、口錢定類集 安政、万延年代

一、御所務方諸出郷定例 安政三

一、畑方田方増引積 文政年代

一、田畑増引高 合付 申立打合 文政十一

増引算立 大検見

一、表大豆粟種割賦一件

一、難破船規定書 文政五、嘉永三年代

御城米難船取計覚

一、豊州代官所代大全書抜 安政四

一、豊前国宇佐社頭之覚 文化十二

一、御在城 村方御年札一件 文政年代

御留守

一、三條触 天保十一

一、宗門改郷覚 万延二

一、御賞美凡例 文政

他に稿本にして^(墨消)ペン字の筆写本次の如きものあり

一、島原藩畑銀帳

一、島原藩税制

一、嶋原御領村々大概様子書 附神代古代史

一、処世録 中村新平稿（木蠟文獻）

一、小浜由来記写本

一、深溝世紀十五冊（二十五卷） 第八卷以下が島原藩関係

三月十五日、松平家管理所に本末金城氏を訪ふ

一、華夷変態 三十七冊 延宝二→享保九を欠る

尚見出御書籍題帳に左の如き書あり

一、廿五箱 貞永式目鈔

一、四三 貞永式目

一、九五 式目追加

一、 建武式目追加

同日、午後神代鍋島邸を訪ねせしも不在にて、神代小学校に赴き校長井口源四郎氏、帆足訓導に面会
三月十六日、平戸高女阿部狂介氏の案内にて松浦家へ赴き引用書目録、南庫帳、御蔵書目録、より左記書を抜
萃す。

一、松浦党旧記 （引用書本三番）

一、松浦党之覚 （々々）

一、松浦党系写 （々々）

一、明暦二年平戸地方並島々田方帳、同抜書 二十冊 (々 九番)

一、明暦三年大村ヨリ参候囚人覚 (々 十番)

一、天祥公御代分限帳 (々)

一、古切支丹之類族存命帳二冊 (々 十二々)

元禄二

一、邪宗門之事抜書 (々)

一、御触書総目録并例書 雄香公御代 (南庫帳 諸類ノ部一四)

一、唐船之儀打払等被出書付 松英公御代 (々 一八)

一、松前対州漂流船一件 五冊 寛政九 (々 三一)

一、壹岐国住人別帳 二冊 寛政十、十一、 (々 五七)

一、浦々御仕置帳、船手万定帳、船手浦々、御船手定法、相定條数書 五冊 天明九 (々 一〇一)

一、旧平戸藩歴史稿 明治元々四 (々 九〇)

一、政庁要録 二十一冊 弘化三

「右者御先代様(道可公) 御以来之御法令類御隠居様思召を以御取集都合三十冊書写被仰付、則題号を政庁要録与御名付被遊今度御用部屋江御附被置候間、御用之余力心懸披見在之候者御家格御旧例等茂詳ニ致会得御政務之一助ニ可相成与思召候事」

一、郡方仕置帳 (々 二二)

一、在方定格 二冊

一、律令要略

一、町方仕置帳 寛政七

一、校正服忌令

午後沖図書館同記念館を見る

十七日、武雄の石井良一氏を訪ね同氏所蔵諸文書記録を見る

一、維新前後諸記録 二冊

一、郡方御條目 安政四

一、達帳 安政頃

一、肥前藩諸規約

一、肥前藩日誌

一、肥前藩御仕組八ヶ條

一、佐賀藩主御発駕心得

一、諸願御達帳類 安政六、慶応三

一、慶応四年太政官日誌

一、慶応四年江城日誌、鎮台日誌、鎮将府日誌

一、諸触達一切扣 明治元、七

一、鶴田氏日記

一、清水龍門先生日記拔書

一、男爵家御側日記 文政五、天保五

一、南文書 一、七

一、郡方御條目 安政四

一、達帳 安政年代

一、肥前に關する報告書

一、維新當時の行政庁

一、肥前史料拾遺

一、橘氏中村文書目錄 一七〇通

一、武雄社（武雄社本記、伴氏系圖、武雄社古文書）

一、藤山考略上下 享保戊申年、及宝曆七写本

一、宗像三社録記及立花山略記

一、武雄温泉に關する史料 二冊

○九月十五日 晴天

金田教授、原田・岡部囑託有富氏ト糸島郡前原町ニ採訪ス

一、由比泰介氏宅ニテ

一、重岡富家感牒記備考一冊ヲ借用シテ仮借用証ヲ入ル

一、西原藤次郎氏宅ニテ古証書類ヲ見ル

後箱島姫越ニテ加布里海岸ノ景ヲ賞ス、元前原小学校長牛原賢二案内セラル

○昭和十六年三月十一日乃至十五日、金田教授大分熊本両縣下に採訪旅行をなす

三月十一日、箱崎出発

三月十一日、臼杵中学に久多罷木儀一郎氏を訪問種々教示を受く、同氏の案内にて臼杵図書館を訪問、同館蔵稲葉家古記録委託せられあり、就中「御会所日記」（延宝→明治四）は珍重すべきもの、更に久多罷木氏の案内にて稲葉家別邸を訪問、こゝには見るべき史料なし。

三月十一日、夜別府宿泊

三月十二日、大分高女を訪ねしも目的を達せず。

三月十二日、大分縣庁に至り文書課長諸隈先氏の好意にて文書課書庫を検索す、明治初年の藩関係記録多少存す。

三月十二日、縣立大分図書館を訪問、同館には藩侯松平氏の古記録を多数保管せり、但し未だ全く未整理なり、就中日記類多数保管せられ、珍重すべきもの、一なり

○（朱書）

三月十二日、午後竹田町に至り竹田中学に今野七郎、衛藤浩氏を訪ひ種々教示を受けたり、衛藤氏の案内にて岡城趾を訪ふ、堅城、而して雄大なるその展望まことに比類罕なりと云ふへし、再遊を期せり。

衛藤氏の案内にて同町長尾子郎氏を訪問、蔵書記録等を拝見、教部借用して帰する（文化史にて謄写済み）。同氏門内の明松杭は珍重すべきものなり。

同夜おそく熊本着宿泊、尚ほ竹田にては竹田莊旧屋を月明に訪ふ。

（欄外）

「大分縣警察後援会書記黒田勇氏の教示を受く」

三月十三日熊本細川家別邸を大藏敬一氏の案内にて訪問、家扶永原邦彦氏の好意にて記録写筆の開（集清）示を受く。

熊本刑法に関する貴重史料殊に判決録口書存在を確かめ得たるを喜ぶ、十五日まで毎日拔書写の爲め訪

問、尚ほ同所の銀台遺事（原本か）は又貴重すべし。

○昭和十六年十一月十六日、十八日

金田教授、波多野院三助手採訪旅行。

十六日、熊本縣立図書館訪問、本学卒業^{（黒田）}本田不二郎君の高配を受く、別府一泊

十七日、大分縣立図書館再訪、縣庁訪問社会教育課の高配を受く、大分縣立第一高女十時英司氏を訪ね種々教示を受く。

十八日、豊後森町一泊、光林寺帆足琢磨氏の高配教示を受く、同氏の紹介にて郷土史に委しき玖珠郡南山田村小野敏夫氏の教示を受く、町長得重弥太郎氏の高配教示を受く、久留島家記録を披見す。

○昭和十七年十二月二日、五日 金田教授

熊本縣庁採訪、横溝縣知事宇田事務官の高配にて所藏記録を借用す

四日、八代市松井男爵家を訪問、桑原庸雄氏の車道を得、家職西原貞雄氏の高配を受く、結構なる昼食を供せられ、種々所藏史料記録を披見す。

○昭和十七年十二月廿一日、廿二日

廿一日、金田教授明石助手熊本縣庁訪問。

廿二日、佐賀市鍋島家内庫所を訪ね、熊本藩関係の記録を借用す。

○昭和十八年三月三十日、三十一日

三十日、金田教授鹿児島地方採訪、本学卒業鹿児島第二中学川辺惟定氏の案を受け、縣立図書館、集成館、市役所を訪ね、図書館にては司書吉江親義氏の、市役所にては助役前田慎吾氏の高配を受く。

三十一日、川辺氏の車道にて鹿児島市玉里島津家別邸を訪ね種々貴重なる記録を拝見す、家扶九良賀野幹氏の高配に接す。

○昭和十八年十月十一日、十三日

十一日、金田教授、原田好一嘱託杵築町再訪、学士北野禮一郎君の案内を受く、町長土居寛申氏の案内にて旧蹟巡歴、豊後国速見郡南杵築村入江築所蔵文書（正応―慶長）六巻を披見す。

宿舎周防屋は豪宿その庭殊によし、後藤国東町長（北野君岳父）、縣社櫻八幡社司河野清実氏（国東町）の来車あり、種々教示を拝す、又杵築中学の田中悦生氏も来訪せらる、酒あり深更に及ぶ。

十二日、町長土居寛申氏宅を訪ひ、種々開示を受く。

十三日、大分市に至り、第二高女の十時英司氏を訪ふ、縣立図書館に館長小川氏を訪ひ、府内藩の記録多数保管せらるゝを知る、その日記借写方を願ひ承諾を受く。

十時氏の紹介にて大分縣聯合史談会常任理事三重野幸夫氏に面会、氏は多数の書籍、記録文書を蔵せらるゝと云ふ、後日開示方を願ふ。

○昭和十八年十二月廿六日

金田教授、原田嘱託、明石助手、北条嘱託、糟屋郡青柳村採訪、浅島武幹氏の教示を受く。

○昭和十九年二月五日

金田教授、佐賀地方裁判所採訪。

○昭和十九年二月九日

金田教授、二月九日伊萬里裁判所採訪。

二月十日、長崎控訴院訪問、又検事局に訪ふ。

○昭和十九年三月二十日

金田教授、熊本地方裁判所を訪ふ。

○昭和十九年三月三十一日

三十一日、金田教授、都城市前田原氏を訪ひ種々開示を受く、都城島津別邸に土持幸平氏（前職）を訪ふ、不在、その令甥深川義親氏の高配に接す。

三十一日、夜人吉着一泊。

四月一日、八代着

八代区裁判所訪問、同夜日奈久一宿

○昭和十九年九月廿八日～十月

金田教授、宮本助教授、二十八日出水町到着、町役場に町長野間口猪太郎氏を訪ふ、川添主事の高配を受け所

蔵の古記録を披見す、全く手入を加へず近來披見の者もなきか如く、虫多く入る、門割制度關係の古記録多し、
借写を約せらる

二十九日、鹿児島着一泊、鹿児島地方裁判所、縣庁文書課、図書館を訪ふ、文書課所蔵古記録借用方を懇請承
知せらる

三十日、都城着、縣立図書館にて座談会を開く、前田原氏の高配を受く、都城一泊。

十月一日、人吉着、宮本助教授人吉一泊、金田教授八代に至る。

○昭和二十年二月二十二日より二十五日迄

金田教授、宮本助教授、北条雇、中村雇以上四名、佐賀唐津及呼子、佐賀熊本ノ採訪旅行ヲナス日程左ノ如シ
二十二日、朝露烈シケレド昼ヨリ晴天麗ラカナリ、朝八時半博多發唐津ニ向フ、唐津ニテ昼食ヲトリ直ニ呼子
ニ向ヒ自動車を馳ル、一時呼子着、役場ヲ訪ネ、助役氏ニ古記録ヲ尋ネタレド無シ、ソレヨリ直ニ小川嶋
捕鯨会社ヲ訪ネ支配人浦郷庄作氏ノ高配ヲ受ケ

小川嶋捕鯨株式会社沿革 一部

生月島全図（絵巻物） 一卷

右二巻ノ借用ヲ得タリ、借用証ハ帰學ノ後出ス事ニス

コレヨリ田島神社ニ參詣、戦時下トモ思ヘヌ好日ニ四人以外ノ收穫ニ喜ブ、呼子町金丸旅館ニ一宿。

二十三日、此ノ朝八時半出發自動車ニテ唐津ヘ行テ汽車ニテ佐賀ニ向フ、途中山本ニテ下車二時間半許リノ間
ニ空服^{（履）}を満ス、佐賀ニ着シハ五時頃ナリト覺ユ、榮徳旅館ニ一先旅装ヲ解キ史蹟ヲ尋ネ日没旅館ニ至リ香
月氏ノ手厚キ配慮ヲ受ケ旅ノ疲レヲ休ムルヲ得タリ

二十四日、朝迄二鍋嶋家別邸内庫所ヲ訪れ岡影氏^(ママ)ノ配慮ニ依り蔵内ニ入り蔵書若干ヲ得タレドモ他日ヲ約シ保管ヲ頼ム、鶴鳴館ニテ中食ヲシ熊本ニ向フ、汽車満員ニテ立錐の余地ナシ、次第二天氣重ク雨ヲ氣使フ、黄昏熊本ノ宿草場町ノ照陽館ニ着ク、豪華ナル室此ノ上ナシ、然レトモ飯ノ少キヲ憂フ、ヤット昼ノ余リニテ満足スル、中野主任ハ落合フ約ナレドモ、残念乍ラ其ノ意ヲ得ズ。

二十五日、昨夜ノ天候、遂ニ雨トナル、次第二雨足強シ、熊本駅ニ着ケド切符中々手ニ入ラズ、行列ニテ二時間ヤット入手、雨次第二強ク帽子ヨリ滴ス、乗客ノ多キコトニ驚シ、ソノ押シ合ノ様宛然阿鼻呼喚ノ騒ギナリ、愚ト云フモサラナリ、汽車ニ乗り込ミ疲レ一時ニ発ス、大牟田以東ハ雨か雪ニ変リ一面ノ雪景色ナリ、熊本城ノ見学、水前寺ノ見学ハ雨ノ為中止ス、時ニ昭和二十年二月二十五日午後六時ナリ。

昭和二十二年八月十三日

宮本教授、金田教授朝倉郡秋月町黒田家を採訪す、秀村学生同行、即日帰福

曝書期に当り黒田家の古記録を充分に調査さるを得たり、参考となるべき法制経済史料等を多数借用し帰れり、借用史料返還期限は本年十二月二十日までと約す、郵送によらず持参すべきを約せり、黒田家にてハ格別の接待を受けたり、当日偶然九大卒朝倉高女教諭の方に面接したり。

金田記

○昭和二十二年九月二十四日〜二十七日

宮本教授、森教授、金田教授、長崎、平戸地方に史料採訪を行ふ、秀村学士同行。

二十五日、長崎図書館の文書記録類調査、旧乙名藤家の旧蔵記録新入のものにして興味多かりき、多数記録類

借用、又副写を依頼し来る。

平戸にては松浦家御都合にて同家所蔵記録文書の披見は叶はざりしが郷土の史家の詳細なる説明を受け種るところ多し、再遊を期して帰る。

注

- (1) 九州文化史研究所は、大正十五年一月の法文学部教授会で史料蒐集のための調査委員会設置が提案されたことに始まり、昭和二年四月には国史学初代教授長沼賢海が「史料蒐集二関スル件」を提出し、それが八年六月の評議会で取り上げられ史料蒐集のための予算措置が講じられ、翌九年に設置された（『九州文化史研究施設とその所蔵資料（一）』、『九州文化史研究所紀要』一二六、一九八一年）。戦後の九州文化史研究所の史料収集・調査・研究活動については秀村撰三「梁山泊「九州文化史研究所」」（『九州文化史研究所紀要』四八、二〇〇五年）に詳しい。

- (2) 『九州文化史研究所所蔵古文書目録』三、（九州文化史研究所、一九五八年）。

- (3) 明治三四年生まれ、昭和五年より九州帝国大学法文学部副手、同七年同法文学部助手、同九年同講師、同一一年助教授、昭和一五年没、四〇歳。

- (4) 明治一六年生まれ、大正一三年より九州帝国大学法文学部国史学科教授、昭和一二年法文学部長、昭和一八年定年退官、昭和五五年没、九七歳。

- (5) 明治三三年生まれ、昭和四年より九州帝国大学法文学部講師、昭和九年九月頃迄に助教授となる。昭和一五年教授、昭和二三年図書館長兼任、昭和二四年没、五〇歳。

- (6) 明治四〇年生まれ、昭和一七年より九州帝国大学法文学部助教授、同二〇年教授。昭和二六年、大阪大学法経学部教授に就任。平成三年没、八四歳。

- (7) 昭和一四年四月、豊津中学校教諭に就任している。豊津中学へ赴任後も度々九州文化史研究所を訪れている。原田氏が後任嘱託となる（『日誌（昭和十四年四月）』）。

- (8) 明治二年生まれ、久留米高等女学校教諭、明治四三年筑後史談会結成、伯爵有馬家修史所史料収集委員、昭和二〇年没。『黒岩文庫』は久留米市文化財收藏館所蔵（日比野利信「筑紫史談会の成立と活動」(『古都太宰府』の展開 太宰府市史通史編別編)、太宰府市、二〇〇四年)二四五頁参照)。
- (9) 資料集をはじめ多くの著作がある。関係資料は久留米市文化財收藏館等に収蔵されている。筑前の地図絵図コレクションは福岡市博物館に収蔵されている。
- (10) 井上囑託の後任として昭和一四年四月五日、「文化研究室公用図書取扱者」を任命される。昭和一九年二月一〇日退職(『日誌(昭和十四年四月)』、九州文化史資料部門所蔵)。
- (11) 任用年月日は不詳。昭和一八年四月二〇日退職(『日誌(昭和十四年四月)』、九州文化史資料部門所蔵)。
- (12) 『日誌(昭和十四年四月)』によれば、筆耕の仕事をしている。昭和一七年九月二八日に退職を申し出ている。
- (13) 明治四五年生まれ、昭和一五年に召集解除。昭和一七年に鹿児島師範学校教諭に就任する以前、九州帝国大学文学部助手を勤めていた。平成四年没、八〇歳。
- (14) 著作として『玖珠郡郷土史 全』(大分県立図書館所蔵)がある。
- (15) 森町九代目町長。昭和六年一月十五より昭和十七年十月十日迄在任。編著に『玖珠郡現代史(未完稿)』(森公民館蔵)があるが未見。
- (16) 古泉学人。明治十八年八月旧庄屋家に生まれる。郡役所に勤務しながら郷土史研究を行う。『日田雑誌』(昭和四年六月創刊、翌五年八月廃刊、第一巻創刊号から第一巻第六号まで)主宰。『日田雑誌』に「日田古今録」を連載し、廃刊後は豊西史談会の機関誌『豊西史談』(昭和十年一月に第一号発刊)に続稿を発表している。主な著作は『日田案内』、『三隈抄』(大正十四年八月)、『郷土資料』、『郷賢列伝』、『豊後日田永山布政史料』上・中・下(昭和十一年十二月)、『五條殿の史実と防火不動尊の由来』(昭和八年六月)などがある。漢詩、俳句を趣味としていた。昭和十九年十一月三十日没。履歴については高倉芳男「郷土史界の恩人たち」(『日田文化』五号、一九六〇年四月)を参照した。
- (17) 武石珠峯。明治二十八年、馬原村字袋、武石角兵衛の四男として生まれる。大正四年東京電気専門学校卒業後は東京で就職。昭和十三年より馬原村役場、同十五年より馬原村農協に勤務。帰省後大正十二年頃より日田義民の研究を始

め、同十四年には亀山公園に義民穴井六郎右衛門碑を建碑、研究成果は『日田義民伝』（昭和二十九年二月）にまとまる。戦前には『日田雜誌』の編集、執筆にも関与しており、戦後は昭和三十一年創刊の『日田文化』にも論考がある。このほかの主な編著作は『諸家文書』（昭和三十七年三月）、『日田県竹槍騒動』（昭和四十四年）、『日田金石文』（昭和四十七年）、『徴兵令と生胆騒動』（大分県立図書館製本）など。千原豊太著『豊後日田永山布政史料』の出版人でもある。昭和三十五年二月十四日没。『日田文化』五号（一九六〇年四月）には、武石繁次氏への追悼文が寄せられており、生前の事績がわかる。

(18) 中津小幡記念図書館所蔵の旧中津藩奥平期の史料のうち、『惣町大帳』は昭和十四年にも四十三冊（B6-34-76）を謄写している。

(19) 赤松翠陰。中津中学教諭。主な著作に『郡誌後材扇城遺聞』（中津小幡記念図書館、昭和七年）、『郷賢福澤先生』（後凋閣、昭和七年）、『雲華上人遺稿』（後凋閣、昭和八年）、『倉成龍渚先生遺稿概説』（後凋閣、昭和十一年）、『扇城先賢三十家詩文集』（後凋閣、昭和十三年）がある。

(20) 福岡県築上郡築城村生まれ、中津中学教諭を昭和八年頃に退職し郷土史研究に励む。とくに豊前地方の古文書収集を行った。築上史談会幹事、中津史談会副会長などを務める。大正十年の宇佐史談会創設にも関与している。研究成果は『築上郡郷土史研究』や『築上新聞』に発表していた。それらをまとめた『豊前郷土史論集 全』（昭和十六年）は本人の死後、友人の赤松文二郎らの手により出版されたもの。昭和十五年没（『豊前郷土史論集』、『宇佐史談』）。薬丸文書については、稲葉倉吉『薬丸文書の研究』（『築上郷土史研究会』第二篇、昭和九年七月、のち『豊前郷土史論集 全』に再録）で検討が加えられている。緒方家文書については、稲葉倉吉『三毛門の緒方氏に就いて』（『築上郷土史研究会』第三篇、昭和一〇年五月、のち『豊前郷土史論集 全』に再録）にて紹介されている。なお大分県立先哲史料館の大津祐司氏より、薬丸文書、湯屋文書については『大分県史料』2（大分県史料刊行会、一九五九年）に、蛸瀬文書、緒方文書については『大分県史料』8（一九五八年）にそれぞれ解題と文書が収録されていること、また耶馬溪平田の西浄寺文書については、『大分県史料』8の新田文書のことである可能性があるとのご教示を得た。

(21) 明治十八年生まれ。国東高等女学校、臼杵中学校に勤務。臼杵史談会中心メンバー。大分県史蹟名勝天然記念物調査会委員としても活躍。昭和四十年没。『大分県史』近代篇Ⅲ五二八～五三二頁（末広利人氏執筆）参照。

(23) 当部門の写本類には「御会所日記」以外にも多数の稲葉家文書写本が存在する。昭和十二年から同十九年にかけて謄写されている。

(24) 長尾子郎については今のところ不明。日記に「(文化史にて謄写済み)」とあるのは、採訪時に謄写済みであったというのではなく、恐らく後日に日記を記述した時点で謄写済であったのではないかと思われる。

(25) 『豊後速見郡史』(大分県速見郡教育会、大正一四年)に引用書目として「入江文書 入江栄蔵」と見える。

(26) 明治一八年生まれ、小学校訓導、校長、宮内省勤務の後、大分県立第一高等女学校、青年師範講師を経て大分県立大野高等学校教諭、この間大分県史蹟名勝天然記念物調査委員会を務める。主な編著作は『豊後文献集録第壹輯 臼杵・府内・岡藩記』(昭和五年九月十一日写し終る、大分県立図書館蔵)、『豊府記聞』上・下(郷土史蹟伝説研究会、昭和五年)、『豊後府内百姓一揆史料(二)』(郷土史蹟伝説研究会、昭和五年)、「隠レタル勤王家中川入山公」(昭和五年)「津江の史蹟伝説」・「神崎村築山古墳」・「戸次町大内古墳」(昭和八年)、「町村別大分県史蹟伝説地詳図 全」(郷土史蹟伝説研究会、昭和十五年)、『郷土の歴史』(大野高校文芸部、昭和二五年)、『はなし』第一―二巻(大野町公民館、昭和二八―三〇年)、「偉大なる平民賀来惟熊」(年未詳)など。

(27) 明治四一年生まれ、九州帝国大学法文学部副手を経て昭和九年より助手、同一一年講師となる。応召後の昭和二一年には教職追放となり昭和二六年追放解除により九州大学文学部助教授、同三三年教授。昭和五九年没、七六歳。本論とは無関係だが、『日誌(昭和十四年四月)』には鏡山講師応召の際に壮行式が挙行されていたことが記されている。

(28) 昭和一五年一月三十一日付で嘱託を発令されている。昭和一四年六月三日条に「元研究補助員大谷氏寄贈の古文書記録を図書館に二応送る」との記事も見える(『日誌(昭和十四年四月)』)。

(29) 大正五年佐賀図書館に発足した肥前史談会での講演を行ったり、昭和二年に発刊した機関誌『肥前史談』に論考を発表している。昭和一六年、対訳本『佐賀先哲叢話』(郷友社)を出版、

(30) 元治元(一八六四)年生まれ、幼少より漢学を学ぶ。明治一三年上京フランス語、法律等を学ぶ。同一八年帰郷後西肥日報記者となる。その後鉾山事業を経て明治三七年佐賀軌道を創設、のち佐賀電気軌道となり専務取締役役に就任。

大正五年の肥前史談会の発足に尽力した。『佐賀縣の事業と人物』、『佐賀県教育史』等参照。

(31) 大塚廟山。儒者。多久にあった「淡水吟社」のメンバーの一人(『佐賀の文学』、佐賀の文学編集委員会、一九八七年)。

(32) 唐津中学校教諭『東松浦郡及唐津市教育会報』、東松浦郡及唐津市教育会、昭和八年。

(33) 『幕末に於ける唐津藩の研究』(昭和八年)、『松浦史綱』(昭和一〇年)、『豊太閤の雄図と名護屋城』(駁々堂、昭和一八年)などの著作がある。

(34) 久保源六。明治三六年西肥日報入社、後県立図書館司書、徴古館に勤める。大正五年の肥前史談会発足に参加、昭和二年創刊の『肥前史談』の編集を担当した。昭和一七年には『郷土出身興垂先賢列伝』を著す(『佐賀の文学』)。

(35) 明治二年武雄生まれ、実業家、政治家。明治一八年九州鉄道会社入社、同四〇年帝国鉄道庁参事、同四三年大阪市電気鉄道部長、大正三から一一年まで福岡県若松市長、昭和一七年まで留萌鉄道専務取締役、この間大正一一年から昭和一七年まで蓬萊銀行頭取、昭和一七年から蓬萊商事社長。大正一四年以降佐賀県史蹟名勝天然記念物調査委員。昭和二五年没、八〇歳。大正一五年以降、武雄の郷土史に関する論考を発表している。それらは没後昭和三十一年に『武雄史』として刊行される(同書)。

(36) 写本類を確認すると、『佐賀県武雄町石井義彦氏蔵書』の『年行司御掟』が昭和二十七年に謄写されている。石井良一家の可能性もある。

(37) 中村隆則。『日誌(昭和十四年四月)』に、昭和十八年七月三十日就職発令、翌八月一日より出勤とある。

(38) 写本類には膨大な量の対馬関係史料の謄写本が存在している。ここでは写本類から対馬関係史料の収集の状況を見ておこう。先ず旧対馬藩主宗家文書については昭和十一年から同二十六年にかけて断続的に謄写されている。このうち昭和十一年の謄写が最も多い。なお萬松院蔵の宗家文書については昭和二十五・二十六年に謄写している。昭和十一年には内山家文書、日高家文書、滝山政太郎所蔵史料、曲漁業組合所蔵史料の謄写も行っている。昭和十五年には斎藤家文書、昭和二十五年には賀島由巳所蔵史料を謄写している。

(39) 『諫早市史』第一巻(一九七四年七月、諫早市史編纂室) 六八八頁。

(40) 平成十三年九月、長崎図書館寄託『諫早文庫』は諫早家の申し出により諫早市立図書館へ移管された。

(41) 結局、当時「一般に知らせざる史料」は見えてないと思われる。「一般に知らせざる史料」とはどのような文書であったであろうか。手掛かりとしては、これより先、東京大学が『大日本史料』編纂のために大村家文書を借用し、昭和六年九月伯爵大村純英に返却していることが確認できる。東京大学が作成したと思われる「大村家古文書目録」を

見てみると、一紙の袋入順の目録編成となっており、今回の調査で金田助教教授が借用した「大村家記」以下の史料とは異なる内容である。これらが「一般に知らせざる史料」である可能性もあろう。なお、大村家文書は現在は大村市立史料館に所蔵されている。

(42) 大村彦右衛門家文書は江戸時代初期のものを中心に約二千点に及ぶ文書群。昭和四十四年に大村市に寄贈され、現在大村史料館に収蔵されている。

(43) 目録を見る限り、『採訪日記』に書き留められた書目の一部は、現在中島聖堂文書に含まれていないようである。なお①「長崎会所勘定帳大意書」については市博物館旧蔵の一般収書のなかに「長崎会所勘定帳大意書付他」との表題の史料があることが確認できる。目録によると同書は「区役所写」となっており、内容は長崎会所勘定帳大意書付、御調進業種大意書である。「区役所」とは長崎区役所（明治七年から同二十二年まで）のことである。長崎区役所による文書収集保存事業は四代区長中井俊行により始められ市内外の貴重史料が謄写された。区役所写「長崎会所勘定帳大意書付他」に「長崎会所勘定帳大意書」が謄写されている可能性もあると思われる。中島聖堂文書を含め長崎市立博物館の収蔵史料の一部は平成十七年に長崎歴史文化博物館に移管されている。

(44) 著作としては、『杜城の花』（昭和五年）および『高来山の雫』（昭和六年）がある。これらは「児童生徒の課外読物（中略）又郷人一般の郷土的理解の一助」となるために書かれた島原半島郷土史。編著として『長崎県島原半島史』（一九五四年）がある。また、廃藩置県後、松平家管理事務所に保管されていた旧島原藩主松平家の文書「松平文庫」の島原公民館図書部への寄贈に際して奔走した一人であったことが知られる（『松平文庫目録』、島原市教育委員会、一九六一年）。

(45) 沖楨介の英霊を弔うために、父沖莊蔵が生家の邸内に建てたもの。沖楨介は明治七年六月生まれ、明治三十四年九月渡清、東文学社の教師となる。のち文明学校を創立。日露戦争に陸軍通訳として従軍。雅児河鉄道橋梁破壊の際に捕虜となり明治三十七年四月戦死。三十一歳。（『長崎縣人物伝』、大正八年五月、長崎縣教育会）

(46) 昭和二年五月に長崎図書館により『藤文庫目録』が作成されている。

(47) 大正十五年一月十二日に発会式が挙行されている（『熊本城』第一巻第八号、昭和十五年九月）。『熊本城史梗概（三版）』（熊本城址保存会、昭和二年）には大正十五年一月付の熊本城址保存会趣意書と会則が掲載されている。会則に

よると熊本城隍保存会は熊本城隍を保存することを目的としており、目的達成のために保存に必要な営繕や、熊本城に関する史料収集及び編纂事業を行うことであつた。昭和二年には、西南戦争で焼失を免れたが年を経て腐朽の進んでいた宇土櫓の改修工事の竣工にこぎつけている〔熊本城〕第四卷第一号、昭和十八年一月〕。

熊本県立図書館の高木康博氏のご教示によれば、昭和二十三年二月九日の朝日新聞に熊本城内平やぐらから検地帳と絵図面が発見された記事が掲載されている。これによると検地帳は「明治維新の際県庁が引継ぎ昭和九年三月熊本城跡保存会に貸与されていたもの」とある。金田助教教授が熊本を訪れた昭和十二年秋には、絵図についても検地帳と同じく県庁から熊本城跡保存会に貸し出されていたものと思われる。

「相良史料」を写本類で探してみると都合十二冊の写本に仕立てられた「相良家史料」第一巻上から第十五巻之二および別冊という表題の史料があることが確認できる。日記にある「相良史料」が写本類の「相良家史料」である蓋然性は高い。「相良家史料」は第一巻などと記されていることから書冊形態の写本であつたと考えられる。名称から「相良家史料」が旧人吉藩主相良家文書の写本であると考ええることに差し支えはないと思われる。それでは「相良家史料」とはいつ誰が作成したものであつたのであろうか。昭和九年五月編綴の「相良家史料総目次」（熊本県立図書館所蔵）の緒言によれば、旧人吉藩主相良子爵は昭和三年六月に相良家史料の調査編纂を雨森真に命じが、翌年病没したため、弟の渋谷季五郎が兄の遺志を継ぎ昭和九年に史料四十一巻を編綴したことが判明する。なお同文には相良家文書の伝来についての興味深い記事があるので紹介しておく。

〔前略〕相良家事務所ニ保存シアル古文書ハ元江戸御屋敷ニ在リタルモノ多数ニシテ人吉ノモノ割合ニ少キカ如シ、例ヘハ御手判事件ノ如キ人吉ヨリ江戸ニ到リシ書状ノミニシテ江戸ヨリ消息ハ一モ存在セス、日記類モ亦江戸屋敷ノモノ多数ナリ、而シテ人吉ノモノハ勘定所即チ會計ニ関スルモノ多シテ、一般行政ニ関スルモノ甚少シ、恐クハ廢藩置県ニヨリ熊本県庁ニ保管転換シアルベシト思ヒ、昭和五年ノ夏熊本県庁ニ出頭シシ、文書課ノ倉庫ヲ搜索シタルモノ一冊モ見出し能ハサリシ、人吉縣ヨリ八代縣白川縣熊本縣と頻繁ニ引継ノ行ハレタル際散佚シタルカ、或ハ文久戌年ノ大火焼燼シタルモノナラント思諱メ居タルニ、近頃ニ至リ明治ノ晩年球磨郡役所ニ於テ鼠害ノ理由ニテ焼却サレタル人吉藩ノ文書長持三棹アリシト、其衝ニ当リシ人ノ直話ノ由伝承シタリ、思フニ郡行政ニ関スル書類ナリシナラン、実ニ痛惜ニ堪ヘサル次第ナリ（後略）

(50) この時筆写したとされる写本は現在当部門には伝存していない。

(51) 内藤家文書が延岡から東京渋谷の内藤邸に移送されるのは昭和十六年のことである。

(52) 写本類には玉里島津家文書の写本四冊があるが、昭和二十三年（B 29―22）と同二十八年（B 29―30）に謄写されたもので、この度の調査で収集されたものではなさそうである。

(53) 採訪した大名家文書については、それぞれの目録解題に経緯が記されている。その他の事例については「大名家文書の史料的特質と目録編成」（『史料の整理と管理』、岩波書店、一九八八年）、大野充彦「山内家文書の伝来について」（『土佐藩主山内家歴史資料目録』、高知県教育委員会、一九九一年三月）、堀口修「尚侯爵家東京邸所蔵史（資）料に関する基礎的研究」（『古文書研究』五六、二〇〇二年一月）、山本博文「島津家文書の内部構造の研究」（『東京大学史料編纂所研究紀要』一三、東京大学史料編纂所、二〇〇三年三月）、内山一幸「近代における旧藩主家文書の基礎的研究」（二〇〇四年三月）、別府信吾「岡山県立図書館に伝わる岡山藩文書について」（『岡山地方史研究』一〇六、二〇〇五年一〇月）などを参照。

(54) 福島幸宏「戦前における楠氏研究」（『新しい歴史学のために』一三八、二〇〇〇年六月）、若井敏明「皇国史観と郷土史研究」（『ヒストリア』一七八、二〇〇二年一月）、伊藤純郎「昭和七年の信州郷土研究」（『信濃』五七一五、二〇〇五年五月）など。